

『大乘二十二問』の本文研究 (三)

田中良昭
宮地清彦
近藤章正
程正

【第二十二問】

第二十二問云、仏在世時、衆僧共行一法、乃仏滅後、分為四部不同、於四部中、何是一法。

謹對、仏在世時、大師導世、真風広扇、法雨遐霽、共稟慈尊、別無師範。

第二十二に問うて云く、「仏在世の時は、衆僧は共に一法を行ずるも、乃ち仏の滅後は、分かれて四部と爲りて同じからず。四部の中に於て、何れか是れ一法なりや。」

謹みて對つ、「仏在世の時は、大師、世を導きたもう。真風広く扇ぎ、法雨遐に霽つ。共に慈尊を稟けて、別に師範なし。」

第二十二に質問する、「仏がこの世におられた時は、衆もろの僧たちは共に一つの法を修行していたけれども、仏が滅せられた後は、分かれて四部となつて同じものではありません。四部の中で、いったいいづれが一つの法でありますか」と。

謹んでお答えします、「仏がおられた時は、偉大な師が世間を導かれました。真実の風が広くそよぎ、法の雨ははるかかなたまでうるおしました。共に慈悲の尊者の教えをつけて、別に師

大土壞道。不二法門。小乘違途。混一知見。並無異轍。咸裏通達。

大土は、道を壞して法門を不二とし、小乗は、途に違いて知見を混一し、並べて異轍なく、咸く通達を裏く。

乃至覺歸真。邪魔孔熾。群生失御。正法陵夷。遂使一味之法。分成諸見之宗。

乃至覺の真に歸するに、邪魔孔だ熾え、群生は御を失い、正法は陵夷して、遂に一味の法をして諸見の宗に分成せしむ。

三藏微言湮滅。群迷之口。競申別趣。各擅師資。互起憎嫌。更相党援。始分部執。盛開二十之名。終久流行。但聞四五云。

三藏の微言は湮滅し、群迷の口は競いて別趣を申ぶ。各おの師資を擅にし、互に憎嫌を起し、更に相い党援して、始めて部執を分つ。盛んに二十の名を開くも、終に久しく流行せるは、但だ

なるものではありませんでした。

大乘の菩薩は、仏の道を發展させて教えの不二平等なるを説き、小乗の声聞・緣覚は、道を遵守し、自らの知見を(仏の知見と)一つのものにし、(大乘も小乗も)ともに異なつたあとかたもなく、ことごとく仏の教えに通達していました。

しかし覺者が涅槃に入られると、邪惡な見解を持った人びとが非常に勢力を増し、衆生は統制を失い、正法が次第に衰退し、遂には仏の一味であった教えを、諸もろの異なつた見解の宗派に分裂させてしまいました。

三藏の仏典の微妙な言葉はほろび、多くの迷える人びとの口先は、競つて別の趣きを申べたてるようになりました。各おのは、師弟關係をほしいままにし、互いに憎惡の念を起こして、更

四、五と云うを聞くのみ。

に互いに徒党を組んで、初めて部派の確執を生じたのです。盛りには二十部の名を開いたけれども、終には久しく流行したのは、そのなかでもただ四乃至五部のみであるということを知ることが出来ます。

説所言四者。即是西域。各有三藏。盛行四宗。一上座部。二説有郡。三大衆部。四正量部。

説く所の四と言ふは、即ち是れ西域にして、各おの三藏ありて四宗盛行す。一には上座部、二には説有部、三には大衆部、四には正量部なり。

説くところの「四」と言ふのは、西域において各おの経・律・論の三藏があつて、四つの部派が盛んに行なわれていました。一には上座部であり、二には説（一切）有部、三には大衆部、四には正量部であります。

言五部者。即是東方。但就律宗。説有五部。

五部と言ふは、即ち是れ東方にして、但だ律の宗に就いて説くに五部あり。

五部と言ふのは、即ち東方において律の宗派について説くのに、五部あります。

一者薩婆多。即十誦律。漢地似行。

一は薩婆多なり。即ち十誦律にして、漢地に行わるるに似たり。

一は、薩婆多です。すなわち『十誦律』であつて、漢地において行なわれているときものです。

二曇無徳。即四分律。漢地盛行。

三彌沙塞。即五分律。漢地少行。

四摩訶僧祇。即僧祇律。漢地不用。

五迦葉毘耶。空伝律名。但有戒本。

東方五部。從西域來。西域四部。咸
伝本有。皆稱仏説。並号聖言。今者須
明有之始末。

二には曇無徳なり。即ち四分律にし
て、漢地に盛行せり。

三には彌沙塞なり。即ち五分律にし
て、漢地にて少しく行わる。

四には摩訶僧祇なり。即ち僧祇律に
して、漢地には用いられず。

五には迦葉毘耶なり。空しく律の名
を伝え、但だ戒本あるのみ。

東方の五部は、西域より来る。西域
の四部は、咸く伝本有りて、皆な仏説
と稱し、並べて聖言と号す。今は須く
之に始末有ることを明らむべし。

二には曇無徳です。すなわち『四分
律』であつて、漢地において盛んに行
なわれています。

三には彌沙塞です。すなわち『五分
律』であつて、漢地において少しでは
あるが行なわれています。

四には摩訶僧祇です。すなわち『摩
訶僧祇律』であつて、漢地において
は用いられていません。

五には迦葉毘耶です。これは空しく
律の名を伝え、但だ戒本が有るのみで
す。

東方の五部は、西域より来たもので
す。西域の四部は、それぞれ伝本があ
つて、皆な仏説と稱し、すべて聖者の
言葉であると言つています。今はこれ
に初めと終わりがあることを明らかに
すべきです。

部執初異。即二十別。及伝永久。唯四五存。先明二十名之所因。後配四五教之同異。

言二十部者。『文殊經』云。十八及本二。皆從大衆出。無是亦無非。我說未來起。

所言本二。有其兩重。仏涅槃後。十有二年。大迦葉波。思集法蔵。擊妙高山。普告之曰。諸聖者等。勿入涅槃。集王舎城。当有法事。是時四洲聖衆咸集。未生怨王。盛興供養。

部執初めに興りて、即ち二十に別かる。永久に伝ふるに及びては、唯だ四、五の存するのみ。先に二十の名の因る所を明らかにし、後に四、五の教の同異を配せん。

二十部と言うは、『文殊經』に云く、十八及び本の二は、皆な大衆より出ず。是もなく、亦た非もなし。我れ未來に起こると説くと。

言う所の本の二には、其の兩重有り。仏の涅槃の後、十有二年、大迦葉波、法蔵を集めんと思ひ、妙高山に撃ちて、普く之に告げて曰く、諸もろの聖者等よ、涅槃に入ること勿れ。王舎城に集いて、当に法事あるべしと。是の時、四州の聖衆、咸く集まる。未生怨

部派の確執が最初に起きて二十に分かれました。この中で永く伝わるようになったのは、四乃至五の部派のみです。先ず二十部の名の因る所を明らかにし、後で四乃至五の部派の教えの同を配するつもりです。

二十部というのは、『文殊(師利問)經』に云っています、十八(部)及び根本の二(部)は、すべて大衆(部)より出たものです。それらは是もなくまた非もないものです。我(仏)は未來に(各部が)出現するであろうと説きますと。

根本の二(部)は、二重の意味があります。佛の涅槃の後、十二年して、大迦葉波(摩訶迦葉)が法蔵を集めようと思ひ、妙高山にて(鼓を)撃ちてすべてのものに告げていいました、諸もろの聖者たちよ、涅槃に入つてはいけません。王舎城に集まって、なすべ

王は、盛んに供養を興す。

過七日已。大迦葉波。恐人衆多。難成法事。簡取五百無學聖僧。精持三藏。具多聞者。於七葉窟。而座安居。雨前三月。集成三藏。一素怛羅。一毘奈耶。三阿毘達磨。余衆亦有通三藏人。既被簡退。共悲歎曰。如來在日。同一師學。法王寂滅。簡異我曹。欲報仏恩。宣集法藏。

七日を過ぎ已りて、大迦葉波、人衆の多くして、法事を成すこと難きを恐れ、五百の無学の聖僧にして、三藏を精持し、多聞を具する者を簡び取り、七葉窟に於て、座して安居し、雨の前の三月に三藏を集成す。一は素怛羅、二は毘奈耶、三は阿毘達磨なり。余の衆も亦た三藏に通ずる人有りて、既に簡退せられて、共に悲嘆して曰く、如來の在りし日には、同一の師に学ぶも、法王、寂滅して、我が曹に異なるを簡ぶ。仏恩に報いんと欲せば、坐して法藏を集むるを宣べんと。

き仏法の事がある筈ですと。この時、四つの州の聖衆は、ことごとく集まりました。阿闍世王は盛んに供養を興しました。

七日を過ぎて、大迦葉波は人数があまりに多すぎて(結果という)法事をなすことが難しいことを恐れ、五百人の無学の聖僧たちで、三藏に精通し、多聞を具えた者を簡び出し、七葉窟において座し、雨安居期間の前(安居)の三ヶ月の間に三藏を集成しました。一は修多羅、二は毘奈耶、三は阿毘達磨であります。それ以外の人もまた三藏に通じている人がいて、既に排除されて共に嘆きながら言いました、如來がおられた日には、同じ師に学んだけれども、法王が亡くなられて、我が仲間の人たちを排除しました。もし仏の恩に報いようと思えば、法藏を集めることを宣言しましょうと。

於其窟外。空閑林中。坐雨安居。集成五藏。前三更加。呪藏雜藏。初以迦葉。僧中上座。名上座部。後以凡聖大衆同居。名大衆部。此即是其第一重本。

既結集已。於二法藏。隨樂受持。不相非序。至仏滅後百有余年。去聖時淹。如日久没。

其の窟外の空閑の林中に於て、坐して雨安居し、五藏を集成す。前の三に呪藏・雜藏を加う。初めは迦葉の僧中の上座なるを以て、上座部と名づく。後には凡聖の大衆の同居せるを以て、大衆部と名づく。此れ即ち是れ其の第一重の本なり。

既に結集し已り、二法藏に於て、樂に隨いて受持し、相い非して序べず。仏の滅後百有余年に至りて、聖時を去ること淹しく、日の久しく没するが如し。

その（七葉）窟の外の空閑の林中において、坐して雨安居し、五藏を集成しました。それは前の三藏に更に呪藏と雜藏を加えたものです。初めは迦葉が僧衆の中の上座であることにより、上座部と名づけました。後は凡夫と聖者の大衆が同居することにより、大衆部と名づけました。これが第一重の本なのです。

既に結集し終わって、二つの法藏において、法樂に隨つて受持し、互いに批判することはありませんでした。仏の滅後百年余りたつて、仏の在世の時を去ること久しく、それはあたかも太陽が永く沈んだままのようなものでした。

【校異】

- この段は、A、B、I本の三本の内、B本を底本とする。
- 1 「問」以下がI本に有り。
 - 2 底本は「云」を欠くも、A本により補う。
 - 3 I本は「世」を「之」に作る。
 - 4 I本は「衆僧共行一法」を「法称一味」に作る。
 - 5 I本は「仏」を「聖」に作る。
 - 6 I本は「不同」を欠く。
 - 7 I本は「謹」を「明」に作る。
 - 8 I本は「仏」以下「更相克援」までの一〇三字を欠く。
 - 9 I本は「云」を「之」に作る。
 - 10 A本は「説」を欠く。
 - 11 底本は「撰」に作るも、I本により「葉」に改む。
 - 12 I本は「有」を欠く。
 - 13 底本は「四」の下に「潤」の一字有るも、I本により取る。
 - 14 底本は「撰」に作るも、I本により「葉」に改む。
A本は「孝」に作る。
 - 15 底本は「撰」に作るも、I本により「葉」に改む。
 - 16 底本は「俺」に作るも、I本により「淹」に改む。
 - 17

【出典】

「典1」『文殊師利問經』卷下・分部品第十五

仏説此祇夜

摩訶僧祇部

体毘履十一

十八及本二

無是亦無非

分別出有七

是謂二十部

悉從大乘出

我説未來起（大正藏卷一四・五〇一頁中）

【語註】

註1 四部：この第二十二問で出る仏教の「四部」について、特にこの「四部」が何を指すか、かねてより疑問視されてい

る。上山大峻『敦煌仏教の研究』（一九九〇、法蔵館）五五～五七頁参照。

摩羯陀国。俱蘇摩城。王号無憂。統

攝瞻部。感一白蓋。化洽人神。

摩羯陀国の俱蘇摩城に、王の無憂と号するもの、瞻部を統攝し、一の白蓋を感じ、化、人神に洽し。

摩羯陀国の俱蘇摩城に無憂王というものがいて、瞻部洲を統率し、ひとつの白光に蓋われたのを感じ、その教化は人間界、天上界にあまねくいきわたっていました。

是時仏法大衆初破。謂因四衆。共議
大天五事不同。分成兩部。

是の時、仏法の大衆、初めて破る。謂く、四衆の共に大天の五事を議する

この時に仏法の信者たちが、初めて分裂しました。すなわち、四衆が共に

に、同じからざるに因りて、分かれて
两部と成る。

四衆と言うは、一は龍象衆、二は
辺鄙衆、三は多聞衆、四は大徳衆な
り。

言大天者。末兔羅國。有一商人。婚
娶幼妻。生一兒子。顏貌端正。字曰大
天。商人賀遷。久滞他國。

子既年壯。母通行烝。後聞父還。心
懷怖懼。与母設計。遂鳩殺之。恐事漸
彰。共竄他國。

大天と言うは、末兔羅國に一の商人
あり。婚じて幼い妻を娶り、一の兒子
を生む。顏貌端正にして、字は大天と
曰う。商人、賀して遷り、久しく他國
に滞る。

子、既に年壯となり、母の逼りて烝
を行す。後に父の還るを聞きて、心に
怖懼を懷く。母と計を設けて、遂に鳩
もて之を殺す。事の漸く彰かとなるを
恐れ、共に他國に竄る。

大天の五事を議論したところ、意見が
同じでなかつたために、分かれて二つ
の部派になつたのです。

四衆というのは、一は龍象衆、二は
辺鄙衆、三は多聞衆、四は大徳衆でし
た。

大天というのは、末兔羅國に一人の
商人がいました。幼い妻と結婚し、一
人の子供を生みました。顔かたちは端
正であり、字は大天といました。商
人は喜んで遷り、長い間他の國に滞つ
ていました。

子供は既に壯年となり、母が逼つて
情を通じてしまいました。後に父が還
るのを聞いて、心に怖れを懷きました。
そこで母と計画して、毒をもって父を
殺しました。事態がだんだんに明らか
になることを恐れて、(母と)共に他の
國に隠れました。

逃難展転。至波咤釐。彼城遇逢。門師羅漢。恐泄家事。矯情殺之。

母後他非。其子遇見。悔恨交集。遂又殺之。

雖造三逆。不断善根。憂悔罪深。何緣当滅。

伝聞沙門。有滅罪法。遂至鷄園。伽藍門外。見一苾芻。誦伽他曰。若人造重罪。修善能滅除。彼能照世間。如日出雲翳。

難を逃れて展転し、波咤釐に至る。彼の城にて遇ま門師の羅漢に逢い、家での事の泄るるを恐れ、矯情して之を殺す。

母、後に他の非あり。其の子、遇ま見て、悔恨交もに集まる。遂に又た之を殺す。

三逆を造ると雖も、善根を断たざれば、罪の深きを憂悔するに、何によりてか当に滅すべきや。

沙門に滅罪の法あるを伝え聞きて、遂に鷄園に至り、伽藍の門外にて一の苾芻を見るに、伽他を誦して曰く、若し人の重罪を造るも、善を修せば能く滅除す。彼れの能く世間を照らすこと、日の雲翳より出るが如しと。

難を逃れて展転し、波咤釐に到着しました。彼の城においてたまたま門師の羅漢と出会い、家での事が漏れることを恐れて、人情に反した態度をとって羅漢を殺しました。

母は後に他の非があり、その子供がたまたま見て悔しさと恨みが交もに募り、また母を殺しました。

三つの逆罪を犯したといつても、善根を断たなかつたから、罪の深さを憂いなければ、何によつたならば（この罪を）滅することができますか。

沙門には滅罪の法があることを聞いて、そこで鷄園に到着し、伽藍の門外で一人の僧を見たと、（その僧が）偈文を誦んでいました。もし人が重罪を犯しても、善行を修めれば重罪を滅除することができる。彼が世間を照らすことができるのは、太陽が雲の

大天聞偈。踊躍⁵歸知。故請出家。有僧遂度。

性識聰敏。三藏遽通。詞論既清。善於化導。波陀⁷釐人。無不歸仰。

既耽名利。惡見乃生。矯言我得。阿羅漢果。五惡見⁴事。從此而生。既稱得聖。人惑聖凡。

育王頻請說法供養。見諸宮女。不正

大天、偈を聞きて、踊躍して歸するを知る。故に出家を請うに、僧有りて遂に度せり。

性識聰敏なれば、三藏に遽に通ず。詞論既に清く、化導を善くし、波陀釐人の歸仰せざる無し。

既に名利に耽り、惡見乃ち生じ、矯りて、我れは阿羅漢果を得たりと言ふ。五惡見の事は此より生ず。既に聖を得たりと稱すれば、人は聖か凡かに惑つ。

育王、頻に説法を請うて供養するに、

鬚⁴りの中から顔を出すようなものと。

大天はその偈を聞いて、大いに喜び、自ら歸すべき処を知りました。そこで出家を請うたところ、(証明する)僧がいて遂に出家しました。

その性質と学識は、聰くすぐれていたので、三藏にたちどころに通じたのです。詞や論理が明晰であり、教化に秀れていたので、波陀釐の人びとで歸依しないものはいませんでした。

しかし既に名利におぼれ、惡見が生じて、偽って、私は阿羅漢果を得たと言いました。五惡見のことは、これより生じたのです。既に聖を得たと稱したために、人びとは聖か凡かに戸惑いました。

阿育王はしきりと説法供養すること

思惟。於夢寐中。漏失不淨。

澆衣弟子。怪而問之。豈阿羅漢。有斯漏失。

大天矯答。魔嬈使然。以漏失因。有其二種。煩惱漏失。羅漢即無。不淨漏失。無學未免。羅漢豈無便痢涕唾。然諸天魔。常疾佛法。見行善者。便往壞之。縱阿羅漢。亦被嬈亂。故我漏失。是彼所為。汝今不応有所疑怪。

諸もろの宮女を見て、思惟すること正しからずして、夢寐中に不淨を漏失す。

衣を洗ひし弟子、怪みて之を問う、豈に阿羅漢にして、斯の漏失有りやと。

大天、矯りて答つ、魔、嬈して然らしむ。以うに、漏失の因に其れ二種あり。煩惱の漏失は、羅漢は即ち無し。不淨の漏失は無學も未だ免れず。羅漢、豈に便痢涕唾無からんや。然るに諸もろの天魔、常に佛法を疾む。善を行ずる者を見れば、便ち往きて之を壞す。縱い阿羅漢なりとも、亦た嬈亂せらる。故に我れの漏失せるは、是れ彼の為せる所なり。汝、今、応に疑怪する所有るべからずと。

をお願いしたところ、(大天は)諸もろの宮女を見て、考えることが正しくなく、寝ていて夢を見て不淨を漏失しました。

衣を洗っていた弟子が、怪しんでこのことを(彼に)質問しました、どうして阿羅漢なのに、このような漏失があったのですかと。

大天が偽って答えました、悪魔が悩ませてこのようにさせたのです。思うに、漏失の原因には二種類があります。煩惱の漏失は、羅漢はありません。不淨の漏失は、無學でも未だに免れません。羅漢はどうして大小の便痢や涙を流し唾をはくことのないことがあり得ましようか。しかしながら諸もろの天魔は、常に佛法を嫉みました。善を實踐する人を見れば、すぐに往つてこれを壊しました。たとい阿羅漢であっても、悩まされ乱されました。だから

又彼大天。欲令弟子。益生歡喜。親
附情發。次第嬌受。四沙門果。弟子怪
疑。咸來白曰。阿羅漢等。応各証知。
如何我等。都不自覺。

大天告曰。諸阿羅漢。亦有無知。勿
自不信。謂諸無知。亦有二種。一者染
汚。羅漢即無。二不染汚。無学猶有。
由斯汝輩。不能自知。

又た彼の大天、弟子をして益ます歡
喜を生ぜしめ、親附の情を發さしめん
と欲し、次第に四沙門果を嬌りて授く。
弟子、怪疑して、咸く來りて白して
曰く、阿羅漢等は、應に各おの証知
すべし。如何が我等、都て自覺せざら
んやと。

大天告げて曰く、諸もろの阿羅漢
にも亦た無知あり。自ら信ぜざること
勿れ。謂く、諸もろの無智に亦た二種
有り。一には染汚なり。羅漢には即ち
無し。二には不染汚なり。無学にも猶
お有り。斯れに由りて汝輩は自ら知る

私が漏失したのも、これは彼の(悪魔
の)為せるところであつたのです。あ
なたがたは今ほ怪しむ所があつてはな
りません」と。

また彼の大天は、弟子たちにますま
す喜びの心を生ぜしめ、(大天への)親
しみの情を發させようとして、一人一
人に四沙門果を授けるふりをしまし
た。弟子達はそれを怪しんで、ことこ
とくやつてきて言いました、阿羅漢
等は、まさに各おの証ることができ
はすです。どうして私達はすべてその
ことを自覺できないのでしょうか
と。

大天は言いました、諸もろの阿羅
漢にもまた無知のものもいます。自分
を信じないことがあつてはなりませ
ん。すなわち諸もろの無知にはまた二
種があるのです。一つは染汚です。羅
漢にはありません。二つは不染汚です。

又於一時。弟子啓白。曾聞聖者。已
度諸疑。如何我等。尚疑諦玉。

大天又告。諸阿羅漢。亦未免疑。疑
有二故。隨眠性疑。羅漢已無。処非処
疑。無学猶有。獨覺於此。而尚有之。
況汝声聞。能無疑惑。

こと能わざるなりと。

又た一時に、弟子啓白す、曾て聖
者は、已に諸もろの疑いを度ると聞く。
如何が我等、尚お諦玉を疑うやと。

大天、又た告ぐ、諸もろの阿羅漢
すら、亦た未だ疑いを免れず。疑いに
二有るが故に。隨眠性の疑いは、羅漢
已に無し。処・非処の疑いは、無学に
も猶お有り。獨覺すら此においては尚
お之れ有り。況んや汝、声聞は、能く
疑惑なからんやと。

無学にも已然としてあるのです。これ
によってあなたがたは自ら知ることが
できないのですと。

またある時に、弟子が言いました、
かつて聖者は、諸もろの疑いを超越
していると聞きました。どうして我わ
れは究極的な真理を疑うのでしょうか
かと。

大天は言いました、諸もろの阿羅
漢でもまた已然として疑いを免れませ
ん。疑いには二つの意味があるからで
す。隨眠性の疑いは阿羅漢には最早あ
りません。しかし処・非処の疑いは、
無学にもなおあるのです。獨覺でさえ
この疑いは、なお有るのです。まして
おやあなたがた声聞は、疑惑のないこ
とがありえましようかと。

【校異】

この段は、A、B、I本の三本の内、B本を底本とする。

- 1 A本は「初」を欠く。
- 2 A本は「大」を欠く。
- 3 I本は「末兔羅国」以下「飄散無遺」までを「云々」として欠く。
- 4 A本は「断」を欠く。
- 5 底本は「知帰」に作るも、A本は「帰知」に作る。
- 6 底本は「固」に作るも、A本により「故」に改む。
- 7 A本は「披」に作る。
- 8 A本は「夢」の前に「夜」の一字有り。
- 9 A本は「由」に作る。
- 10 A本は「覚」に作る。

【語註】

註1 瞻部：瞻部洲 須弥山の周りに四洲があつて、その中の南方の洲を指す。ジャンプー樹が多くは生えている洲という意味。

註2 人神：人間界と天上界。

註3 苾芻：修行僧(比丘)のこと。

註4 五悪見：五種の邪悪な見解のことで、身見・辺見・邪見・見取見・戒禁取見を言つ。

註5 四沙門果：出家者が修行によつて達する四段階の境地のことで、須陀含、斯陀含、阿那含、阿羅漢の四果を言つ。

註6 諦宝…究極的な真理を宝に譬えたもの。

註7 随眠性…随眠煩惱のこと、煩惱の潜在的な能力を指す。

註8 処・非処…処はことわりで、理にかなうことであり、非処は理に背くこと。

「設諸弟子。披読諸經。因白師言。」¹「經說無學。有聖慧眼。我於解脫。應自証知。如何但由師言悟入。」²

彼即答言。有阿羅漢。但由他入。不能自知。如舍利子。智慧第一。仏若不知。猶不能知。況汝等輩。非由他入。是故汝等不應自輕。

諸もろの弟子をして諸經を披読するを設くるに、因みに師に白して言く、『經』に「無學には聖なる慧眼有り」と説く。我れ、解脫に於て、應に自ら証知せり。如何が但だ師の言のみに由りて悟入するや」と。

彼、即ち答えて言く、阿羅漢には、但だ他に由りて入るも、自ら知ること能わざる有り。舍利子の如し。智慧第一なれども、仏、若し記せざれば、猶お知ること能わず。況や汝等の輩は、他に由りて入るに非ざらんや。是の故に汝等は、應に自ら輕んずべからずと。

多くの弟子たちに諸もろの經典を読む機会を設けたところ、(弟子たちは師に向かつて)「こう言いました、『經』に、「無學のものには聖なる智慧の眼がある」と説かれています。私は解脫した際に、まさしくそのことをよく知ることができました。どうしてただ師の言葉に由るだけで悟りに入るのでしょうか」と。

師は答えて言いました、阿羅漢には、ただ他の言葉のみによつて悟りに入ることはあつても、自ら(悟りに入つたことを)知ることができません。それは舍利子のようなものです。(彼は)智慧は第一であります、仏がもし悟りの記を授けなければ、猶お知ることができないのです。ましてあなた方の

然彼大天。雖造衆罪。不起邪見。不斷善根。

後於夜中。自懷罪重。當於何処。受諸極苦。憂惶^注所逼。數唱苦哉。

近住弟子。驚怪來聞。彼便告言。我呼聖道。謂有聖道。若不至誠。稱苦命喚。終不現前。故我昨夜。唱苦哉矣。

然るに彼の大天は、衆もろの罪を造ると雖も、邪見を起さず、善根を断たず。

後に夜中に於て、自ら罪の重きを懷^{いだ}くに、當に何処にて、諸もろの極苦を受くべきやと。憂惶^{ウウフウ}逼る所、數は苦なる哉と唱う。

近住の弟子、驚き怪しみ来りて聞くに、彼れ便ち告げて言く、我れ聖道を呼べり。聖道有りと謂うも、若し至誠もて苦なりと稱し、喚ばしめざれば、終に現前せず。故に我れ、昨夜、へ苦

ような人達は、他(の言葉のみ)によつて悟りに入れるはずはないではありませんか。だからあなた方は、自らを輕んじてはなりませんと。

しかしながら彼の大天は、諸もろの罪を造つたとはいつても、邪見を起さずことなく、善根を断つこともありませんでした。

後に夜中に、自らの罪の重いことを心に懷いて、いつたいどこにいて諸もろの極苦を受けなければならぬのだらうかと。不安が募^つつて、しばしば、なんと苦しいことかと声をあげました。

近くに住む弟子が驚き怪しみ、やつて来て尋ねたところ、彼は弟子に告げて言いました、私は聖なる道と呼んだのです。聖なる道があると言つても、もし真心の底から苦しいと言ひ、(苦に)

大天於後。集先所説。五惡見事。而作頌曰。

余所誘無知
猶預他令人
道因声故起
是名真仏教

十五日夜布瀦陀時。次当大天。昇座誦戒。彼便自誦。所造伽他。爾時衆中有学無学。多聞持戒。修静慮者。聞彼所説。無不驚呵。咄哉愚人。寧作是説。此於三蔵。曾所未聞。咸即翻彼所説。頌云。

余所誘無知
猶豫他令人

なる哉」と唱うと。

大天、後に於て、先に説く所の五惡見の事を集めて、頌を作りて曰く、

余に誘いざなわれると、無知と、猶預ゆうよと、他に入らしめらると、道の声に因るが故に起こるとは、是を眞の仏教と名づく。

十五日の夜、布瀦ふじゆた陀の時、次に大天の座に昇りて戒を誦するに当たると。彼れ、便ち自ら造りし所の伽他かたを誦す。爾の時、衆中の有学・無学・多聞・持戒・静慮を修する者は、彼の説く所を聞きて、驚き呵いからざるなし。咄とつなるや、愚人なるや。寧いんくわんそ是の説を作すや。此れは三蔵に於ては、曾て未だ聞かざ

喚ばされなければ、終に（聖なる道は）ここに現前することはないのです。だから私は昨夜、へなんと苦しいことか」と声をあげたのですと。

大天は後に、前に説いたところの五惡見の事を集めて、詩を作つて次のように言いました。

余の人に誘いざなわれることと、無知と、猶預ゆうよと、他によつて（悟りに）入らしめられることと、道は声によつて起こるとは、これを眞の仏教と名付けるのですと。

十五日の夜、布瀦ふまつの時、次に大天が座に昇つて戒を誦する番がやつてきました。大天が自ら造つたところの伽他かたを誦えました。その時、大衆中の有学・無学・多聞・持戒・静慮を修する者は、大天の説くところを聞いて、驚いて呵いからないものはありませんでした。何と愚かな人なるぞ。どうして

道因声故起
汝言非仏教

る所なり」と。咸く即ち彼の所説を翻えし、頌に云く、

余に誘われると、無知と、猶預と、他に入らしめらると、道の声に因るが故に起るといふ、汝の言は仏教に非すと。

このようにいい方をするのか。これは仏教の三蔵にあつては、いまだかつて聞いたこともないことだ」と。ことごとく大天の説くところを翻えして、詩でもつて次のように云いました。

余の人に誘われることと、無知と、猶預と、他によつて(悟りに)入らしめられることと、道は声によつて起るといふ、あなたの言つたことは、仏教ではありませんと。

於是竟鬪諍紛然。乃至崇朝^{註4}。朋党¹⁰転盛。城中仕庶。乃至大臣。相次来和。皆不止息。

是に於て、竟に鬪い諍うこと紛然たり。乃ち崇朝に至るに、朋党^{註4}たる盛なり。城中の仕庶より乃至大臣まで、相い次いで来りて和むも、皆な止息せず。

ここにおいて、ついに鬪い争うことが多く起りました。そして夜明けから朝食頃までに、同じ考えの仲間が益ます増えていきました。城の中で仕える者から大臣に至るまで、相次いでやつて来て和みはしたけれども、(議論)すべてがなくなることはありませんでした。

王聞見已。亦復生疑。遂乃令僧。兩

王、聞見し已りて、亦復た疑を生ず。

王は(議論を)聞き終わつて、また

朋別住。

賢聖朋内。耆年雖多。而僧數少。大天朋内。耆年雖少。而衆數多。王遂從多。依大天請。訶伏衆。

事畢還宮。時諸聖賢。知衆乖違。欲往他所。

育王聞已。自怒令曰。宜載破船。中流墜溺。驗其聖凡。

遂に乃ち僧の両朋をして別に住せしむ。

賢聖の朋内は、耆年多しと雖も、僧の数は少なし。大天の朋内は、耆年少なしと雖も、衆の數多し。王、遂に多きに從いて、大天の語に依りて余の衆を訶して伏す。

事畢りて宮に還る。時に諸もろの聖賢は、衆の乖違するを知りて、他の所に往かんと欲す。

育王、聞き已りて、自ら怒り、令して曰く、宜しく破船に載せ、中流にて墜溺せしめ、其の聖・凡を驗すべしと。

疑いを起こしました。そこで僧の（相対立する）双方を別に住ませました。

賢聖の仲間、老人は多いけれども、僧の数は少なかったのです。（一方、）大天の仲間、老人は少ないけれども、衆僧の数は多かったです。王はそこで数の多い方に從って、大天の言葉によつて賢聖の人びとを叱つて伏せさせました。

事が済んだので、王宮に帰りました。時に諸もろの聖賢は、大衆が逆らっていることを知り、他の所に行こうとしました。

育王はこれを聞き已って、自ら怒り、命令して言いました。壊れた船に載せ、中流で墜し溺れさせて、その聖か凡かを試すべきであると。

時諸聖衆。遂運神通。又接同志。諸凡夫衆。變種種形。陵空而去。

王聞悲悔。遣人追尋。王躬固迎。僧般辭命。王遂總捨迦濕彌羅。造僧伽藍。安置聖衆。

於後大天。相者見云。竊記七日。定当命尽。

弟子聞已。憂惶白師。便矯答言。吾久知矣。

時に諸もろの聖衆は、遂に神通を運らし、又た同志・諸もろの凡夫衆を接して、種種の形に変え、空に陵りて去らしむ。

王、聞きて悲悔し、人をして追尋せしむ。王、躬ら固に迎えるも、僧、般く命を辞す。王、遂に総じて迦濕彌羅を捨て、僧の伽藍を造りて、聖衆を安置す。

後に大天を、相者の見て云く、竊に記するに、七日にして定んで当に命の尽くべけん と。

弟子、聞き已り、憂惶して師に白すに、便ち矯りて答えて言く、吾れ久しく知れり と。

時に諸もろの聖衆は、そこで神通力をめぐらし、また同じ志の者や、諸もろの凡夫の人びとを接引して、種々のすがた形に変えて、空に陵って去かせました。

王はそれを聞いて悲しみ悔やみ、人を遣つて追いかせせました。王は自らしっかりと迎えようとしたが、僧たちはその命を強く辞退しました。王はそこでカシミール(の地)を喜捨して、僧の伽藍を作り、聖衆を住ませました。

後に大天を占師が見て言いました、ひそかに予言するに、七日で命が尽きるであろう と。

弟子たちは聞き已って、悲しんで師(大天)に告げると、(師は)偽って答えて言いました、私は以前からずっと知っていた と。

遣人散告。涅槃之期。王庶悲哀。香薪焚葬。火至便滅。竟不能然。

占相者云。不消厚葬。宜狗糞汁。而洒穢之。便依其言。火遂炎發。焚蕩儵尽。飄散無遺。

人をして涅槃の期を散らし告げ遣む。王も庶も悲哀し、香薪もて焚葬す。火至れば便ち滅し、竟に然すこと能わす。

占相者云く、厚葬に消せざれ。宜く狗の糞汁もて、洒きて之を穢すべしと。便ち其の言に依りて、火は遂に炎を發し、焚蕩して儵ち尽き、飄散して遺るなし。

そして人びとを遣つてその涅槃の時期を諸方に告げさせました。王も庶民も悲しみ、香薪をもって火葬しようとしたところ、火を近づけると消えてしまい、遂に燃やすことができませんでした。

占い師は言いました、手厚い葬儀の必要はない。狗の糞汁でもってそれに洒いでこれを穢すべきだと。すなわちこの言葉によって、火は遂に炎を發し、燃え上がってたちまち灰になり、飛び散つて何も遺るものはありませんでした。

【校異】

この段は、A、B本の二本の内、B本を底本とする。

- 1 底本は不明。
- 2 A本は「覺」に作る。
- 3 底本は「自」に作るも、A本により「能」に改む。
- 4 A本は「昨」を欠く。

- 5 A本は「曰」を欠く。
- 6 A本は「命」に作る。
- 7 A本は「告」に作る。
- 8 A本は「覚」に作る。
- 9 A本は「覚」に作る。
- 10 底本は「用」に作るも、A本により「朋」に改む。
- 11 底本は「儻」に作るも、A本により「黨」(党)に改む。
- 12 底本は破損により「諸」の一字不明なるも、A本により補う。
- 13 底本は「聖」の一字不明なるも、A本により補う。
- 14 底本は「載破」の二字不明なるも、A本により補う。
- 15 底本は破損により「溺驗」の二字不明なるも、A本により補う。
- 16 底本は「種種形。陵空而去。王闍悲悔」の一字不明なるも、A本により補う。
- 17 A本は「仰」に作る。
- 18 A本は「令」に作る。
- 19 底本は「弥羅。造僧伽藍。安置」の八字不明なるも、A本により補う。
- 20 A本は「竊記七日。定当命尽。弟子闍已。憂惶」の一四字不明。
- 21 A本は「定」に作る。
- 22 A本は「薪」を欠く。
- 23 A本は「焚」に作る。

【出典】

「典1」 出典不詳

【語註】

- 註1 憂惶：憂いおののく、不安なるさま。
- 註2 猶預：大天の五事の第三。阿羅漢でもなお疑問をいだくことがあること。
- 註3 布瀾陀：布沙陀ともいい、布薩のこと。
- 註4 崇朝：夜明けから朝食の時刻に至るまでをいう。

由是乖諍、僧成兩部。

是の乖諍ひがじょうに由りて、僧、兩部を成す。

大天朋党。取結集時。大衆為名。名大衆部。諸賢聖衆。取結集時。上座為名。名上座部。此即本部。第二重分。是十八部の根本也。大衆部中。既無賢聖。

大天の朋党は、結集を取るの時、大衆を名と為し、大衆部と名づく。諸もろの賢聖の衆は、結集を取るの時、上座を名と為し、上座部と名づく。此れ即ち本の部の第二重の分にして、是れ十八部の根本なり。大衆部の中には、既に賢聖なし。

この争いによって、僧団は二部に分裂しました。

大天の仲間の一派は、結集がなされた時、大勢の僧衆を名として、大衆部と名づけました。諸もろの賢聖の僧衆たちは、結集がなされた時、上座（長老）を名とし、上座部と名づけました。これが本の部の第二回目の分裂であり、これが十八部の根本なのです。しかし大衆部の中には、既に賢聖はいま

二百年初。因有乖諍。前後四破。流出八部。通成九部。上座七破。通成十部。共計通成二十部也。其如『百法抄』中。

初第一³。流出三部。一者說世出世法⁵皆是假。既唯說假。名一說部。二者世法顛倒。則不名實。說出世法實。名說出世部。三者。上古有仙。染鷄生子。部主姓氏。名鷄胤部。

二百年の初め、乖諍有るに因りて、前後四たび破し、八部を流出す。通じて九部と成る。上座は七たび破し、通じて十一部と成る。共に計えて通ずれば、二十部と成るなり。其れは『百法抄』中の如し。

初めの第一は、三部を流出す。一は、世と出世の法は皆な是れ仮なりと説く。既に唯だ仮を説くのみにして一説部と名づく。二は、世法は顛倒なれば、則ち実と名づけず。出世の法は実なりと説くを説出世部と名づく。三は、上古に仙あり。鷄を染して子を生む。部主の姓氏もて鷄胤部と名づく。

せんでした。

(仏滅後)二百年の初めに、更に争いがあつたために、(大衆部は)前後四回の分裂があり、八部を派生し、全部で九部となりました。上座部は七回の分裂があり、全部で十一部となりました。すべてを計え合わせると二十部となるのです。それは『百法抄』の中に示されているとおりです。

初めの第一の分裂で、三部が派生しました。一つは、世間と出世間の法は、すべて仮のものであると説くのです。既にただ仮を説くだけでしたので、一説部と名づけました。二つは、世法は真実に反しているために、実とは名づけませんでした。出世間の法は実であると説くのを、説出世部と名づけました。三つは、大昔に仙人がいました。鷄を孕し子供を生ませました。部派の主の姓氏をもつて、鷄胤部と名づけま

第二破者。又因乖諍。流出一部。此師学広。玄悟仏経。勝過本部。名多聞部。

第三破者。又有一師。説世出世。亦有少仮。不同一説。及説出世。名説仮部。

第四破者。二百年満。有一外道。捨邪帰正。亦名大天。重詳五事。分出三部。一者此人所居。山似靈廟。即依本処。名制多山部。二者又有一類。与此乖違。住制多山西。名西山住部。三者又有一類。乖前二見。住制多山北。名北山住部。故大衆部。四破別分。本末

第二の破とは、又た、乖諍に因りて一部を流出す。此の師は学広く、仏経を玄悟し、本の部を勝過せば、多聞部と名づく。

第三の破とは、又た一師あり。世も出世も、亦た少仮有りと説きて、一説〔部〕及び 説出世〔部〕と同じからず。説仮部と名づく。

第四の破とは、二百年満ちて、一の外道有り。邪を捨て正に帰す。亦た大天と名づく。重ねて五事を詳にし、三部を分出す。一は、此の人の居するところの山、靈廟に似る。即ち本処に依りて、制多山部と名づく。二は、又一類あり。此と乖違し、制多山の西

した。

第二の分派とは、また争いによつてそこから一部が派生しました。この師は、学問が広く仏の経を深く悟つていて、本の部よりも勝つていたので、多聞部と名づけました。

第三の分派とは、また一人の師がいました。世間の法も出世間の法も、また少しばかり仮があると説き、一説部及び説出世部とは同じではありませんでした。(したがって)説仮部と名づけました。

第四の分派とは、二百年経つて、一人の外道がおりました。邪な道を捨てて正しい道に帰依しました。またその人は大天といいました。重ねて五事を明らかにし、三つの部派を分出しました。一つは、この人(大天)のいるところの山が、靈廟に似ていました。つ

別説。有其九部。

に住すれば、西山住部と名づく。三は、又た一類有り。前の二見と乖ちがひ、制多山の北に住すれば、北山住部と名づく。故に大衆部は、四破の別に分かれ、本末の別を説かば、其れ九部有り。

まりこのところによつて、制多山部と名づけました。二つは、また一類のものがいて、これ(制多山部)と意見を異にし、制多山部の西側に住したことから、西山住部と名づけました。三つは、また一類のものがいて、前の二部の見解とは異なり、制多山の北に住したことから、北山住部と名づけました。だから大衆部は、四段階の分裂で別々に分かれ、本と枝葉の別を説くならば、そこには九部有ることになります。

其上座部。賢聖住持。經爾所時。一味和合。三百年初。四百年末。本末七破。為十一部。

其の上座部は、賢聖住持し、爾もの所を經し時は、一味和合するも、三百年の初めより、四百年の末までに、本末七たび破して、十一部と為る。

その上座部は、賢聖が担たっており、賢聖が担っている間は、全体が一味和合していましたが、(仏滅後)三百年の初めより、四百年の終わりまでに、本末七回の分派により、十一部となったのです。

第一破者。有一大徳。造『発智論』。令後進者。研究深宗。其諸上坐。先唯習定。既遭詰難。自恥無智。避諸論者。

第一の破とは、一の大徳有り。『発智論』を造りて、後進の者をして深き宗を研究せしむ。其の諸もろの上座は、

第一の分派は、一人の大徳がいて、『発智論』を造って、後進の者たちに深い教えを研究させたのです。その諸

移居雪山。転立別名。名言転部。其学論者。説一切法。皆有実体性。名説一切有部。又説有為因。亦名説因部。

第二破者。於有部中。流出一部。上古有仙。染牛生子。是部性名犢子部。

第三破者。從犢子部。流出四部。一謂部主。有法可上。法在人上。名法上部。二顯部主。姓賢巨善。賢聖苗裔。名賢曹部。三顯部主。善立法義。刊定

先には唯だ定を習するのみなるも、既に詰難せらるるに遭い、自ら無智なるを恥す。諸もろの論者を選けて、移りて雪山に居す。転た別名を立て、言転部と名づく。其の論を学ぶ者は、一切の法は皆な実体性有りと言はば、説一切有部と名づく。又た、有を因と為すと説かば、亦た説因部とも名づく。

第二の破とは、有部の中より、一部を流出す。上古に仙ありて、牛を染して子を生む。この部の姓を犢子部と名づく。

第三の破とは、犢子部より四部を流出す。一は、部の主の法を上とす可き有りて、法は人より上に在りと謂わば、法上部と名づく。二は、部

もろの上座たちは、最初はただ禅定を修するのみでありましたが、既に（論者に）問いつめられる状況になって、自ら無智であることに恥じいつたので、諸もろの論者たちを選けて、移動して雪山に居住しましたが、そこで別の名を立てて、言転部と名づけました。その論（発智論）を学ぶ者は、すべての法は皆な実体性が有ると説いたから、説一切有部と名づけました。また（彼等は）有を因と為すと説いたので、また説因部とも名づけました。

第二の分派とは、有部の中から一つ部派を流出しました。大昔に仙人がいて、牛を孕して子を生ませました。この部の姓を犢子部と名づけました。

第三の分派とは、犢子部から四つの部派を流出しました。一つは、部の主が法を上にするべきであるとし、法は人より上に在ると謂ったので、法上部と

無邪。其量必正。名正量部。四謂部主。所居近山。林木蔭鬱。繁而且密。名密林山部。

の主の姓は、賢にして且つ善、賢聖の苗裔なるを顯さは、賢青部と名づく。三は、部の主の善く法義を立て、判定するに邪無く、其の量必ず正なるを顯さは、正量部と名づく。四は、部の主の居する所、山に近く、林木蔭鬱し、繁にして且つ密なりと謂わば、密林山部と名づく。

第四破者。復從有部。流出一部。謂此部主。身雖出家。本是國王。名化地部。

第四の破とは、復た有部より一部を流出す。此の部の主は、身は出家なりと雖も、本は是れ國王なりと謂わば、化地部と名づく。

第五破者。從化地部。流出一部。部主業弘。含容正法。如藏之密。名法藏部。

第五の破とは、化地部より一部を流出す。部の主の業弘く、正法を含容すること、藏の密なるが如くなれば、法藏部と名づく。

名づけました。二つは、部の主の姓が、賢にして且つ善、賢聖の末裔であることを顯したので、賢青部と名づけました。三つは、部の主のよく法の意義を押し立てて、誤りを正すのに邪念がなく、その裁量が必ず正しかったことを顯したので、正量部と名づけました。四つは、部の主の居る所が山に近く、林木が生い茂り、繁っていて且つ密なりということから、密林山部と名づけました。

第四の分派とは、また有部から一部を流出しました。この部の主は、身は出家であるけれども、もともと國王であったということから、化地部と名づけました。

第五の分派とは、化地部から一部を流出しました。部の主の業績が弘く、正しい法をその中に含むこと、あなたがもお蔵の中にびっしりつまっているよ

第六破者。三百年末。復從有部。流出一部。部主上代。有仙。身真金色。飲弊余光。名飲光部。

第七破者。四百年末。復從有部。流出一部。自称我以慶喜為師。依經立量。名經量部。說有種子。能從前世。轉至後世。名說轉部。

如上是上座、本末重破。兼本共成十一部計。通前九部。為二十焉。一大衆部。二一說部。三說出世部。四鷄胤部。五說仮部。六多闍部。七制多山部。八西

第六の破とは、三百年の末に、復た有部より一部を流出す。部の主は、上代に仙あり、身は真の金色にして、余の光を飲弊せば、飲光部と名づく。

第七の破は、四百年の末に、復た有部より一部を流出す。自ら我れは慶喜を以て師と為すと稱し、經に依りて量を立たば、經量部と名づく。種子有りて、能く前世より轉じて後世に至ると説かば、說轉部とも名づく。

是の如く、上座(部)は、本末重ねて破し、本を兼ね共に十一部の計を成す。前の九部を通ずれば、二十と為れり。一は大衆部、二は一說部、三は

うであるところから、法藏部と名づけました。

第六の分派とは、(仏滅後)三百年の末にまた有部より一部を流出しました。部の主は、先祖に仙人がいて、身は真の金色で、自分以外の光を飲み込んだので、飲光部と名づけました。

第七の分派とは、(仏滅後)四百年の末に、また有部から一部を流出しました。自ら自分はアーナンダを師としたと稱し、經典を依り処として裁量を行ったので、經量部と名づけました。種子が有って、それによって前世より轉變して後世に至ると説くことから、說轉部とも名づけました。

このように、上座(部)は、本末を重ねて分派し、根本を合わせると、その数は十一部となりました。前(大衆部)の九部と合わせると、二十部とな

山住部。九北山住部。十上座部。十一
説一切有部。十二犢子部。十三法上部。
十四賢青部。十五正量部。十六密林山
部。十七化地部。十八法蔵部。十九飲
光部。二十經量部。

説出世部、四は鷄胤部、五は説仮部、
六は多闍部、七は制多山部、八は西山
住部、九は北山住部、十は上座部、十
一は説一切有部、十二は犢子部、十三
は法上部、十四は賢青部、十五は正量
部、十六は密林山部、十七は化地部、
十八は法蔵部、十九は飲光部、二十は
經量部なり。

已明¹⁰二十部¹¹因由竟。

已に二十部の因由を明らかにし竟^{おわ}れ
り。

つたのです。一は大衆部、二は一説部、
三は説出世部、四は鷄胤部、五は説仮
部、六は多闍部、七は制多山部、八は
西山住部、九は北山住部、十は上座部、
十一は説一切有部、十二は犢子部、十
三は法上部、十四は賢青部、十五は正
量部、十六は密林山部、十七は化地部、
十八は法蔵部、十九は飲光部、二十は
經量部です。

以上によつて、二十部の成り立ちを
明らかにし竟^{おわ}りました。

【校異】

この段は、A、B、I本の三本の内、B本を底本とする。

- 1 I本以下有り。I本は「由是」を「因」に作る。
- 2 I本は「部」以下一六字を欠く。
- 3 I本は「初」以下「……通前九部」までを欠く。
- 4 底本は「一」の下に「破」有るも、A本により取る。
- 5 A本は「世」を欠く。
- 6 A本は「諸」を欠く。

- 7 A本は「出」を欠く。
- 8 A本は「我」に作る。
- 9 I本は「言一部者」に作る。
- 10 I本は「已明」を欠く。
- 11 I本は「因」を欠く。

【語註】

註1 五事：大天の五事。五事とは、余所誘（阿羅漢でも、他のものに誘惑されると不浄を漏らすことがある。）無知（阿羅漢でもまだ知らないことがある。）猶予（阿羅漢でも、なお疑問をいだくことがある。）他令入（阿羅漢でも、自らは阿羅漢になつたことを知らず、必ず他人が汝はもう阿羅漢の位に入つたとおしえてくれて、はじめて自分が阿羅漢になつたことを知る。）道因声故起（さとりは、ことばによって表される。）この五事を認める立場より大衆部が起り、否認する立場が上座部となつた。

註2 苗裔：遠い子孫のこと。

以四五部。相配属者。漢地所明、五部名中。薩婆多者、即四部中。説一切有。当二十中。第十一部。曇無徳者。唐言法蔵。四部中無。即二十中。第十八部。彌沙塞者。唐言化地部。四部中無。是二十中。第十七部。摩訶僧祇。四中大衆。即二十中。第一部也。迦葉

四と五の部を以て相配属せば、漢地に明かす所の五部の中に、薩婆多とは、即ち四部の中の説一切有にして、二十中の第十一部に当たる。曇無徳とは、唐に法蔵と言う。四部の中には無し。即ち二十中の第十八部なり。彌沙塞とは、唐に化地部と言う。四部

四部と五部とを以てそれぞれ配属したならば、中国で明らかにされているところの五部の名の中で、薩婆多とは即ち四部の中の説一切有部のことである。これは二十部の中の第十一部に当たります。曇無徳とは、唐では法蔵と言います。四部の中にはありません。それ

毘耶。唐言飲光。即二十中。第十九部。其四部中。初一上坐。五部中無。即二十中。是第十部。四中正量。五部中無。是二十中。第十五部。

如是東西。共行六部。一上坐部。二說有部。三大衆部。四正量部。五化地部。六法藏部。余十四部。兩処不行。其化地部。本出印度。印度已滅。于闐盛行。其法藏部。本出西方。西方不行。東夏廣闐。化地有部。漢地似行。上坐

の中には無し。是れ二十の中の第十七部なり。摩訶僧祇とは、四の中の大家にして、即ち二十の中の第一部なり。迦葉毘耶とは、唐に飲光と言う。即ち二十の中の第十九部なり。其の四部の中の、初めの上座は、五部の中には無し。即ち二十の中の是れ第十部なり。四の中の正量は、五部の中には無し。是れ二十の中の第十五部なり。

是の如く東西には、共に六部を行う。一は上座部、二は說有部、三は大衆部、四は正量部、五は化地部、六は法藏部なり。余の十四部は、兩処には行われず。其の化地部は、本は印度より出ずるも、印度にては已に滅し、于闐にて

は二十部の中の第十八部に当たります。彌沙塞とは、唐では化地部と言います。四部の中にはありません。これは第二十部の中の第十七部に当たります。摩訶僧祇とは、四部の中の大家部であつて、すなわち二十部の中の第一部に当たります。迦葉毘耶とは、唐では飲光と言います。すなわち二十部の中の第十九部に当たります。その四部の中の、初めの上座(部)は、五部の中にはありません。すなわち二十部の中の第十部に当たります。四(部)の中の正量(部)は、五部の中にはありません。それは二十部の中の第十五部に当たります。

このように東西では、共に六部が行われています。一は上座部、二は說(一切)有部、三は大衆部、四は正量部、五は化地部、六は法藏部です。残りの十四部は、東西兩地では行われませんでした。その化地部は、本は印度から

正量。印度盛行。余方不見。

初分部時。二十具足。去聖漸遠。法教淪涓。住持人無。部計即滅。住持人在。部計乃存。不以諸部。有是有非。而其部執。有存有沒。不以法有。法用不用。而於諸部。論正論邪。如折金杖。彼此俱金。但依修行。皆得四果。如有毀謗。並墮三塗。情見不乖。皆是一法。

盛行す。其の法藏部は、本は西方より出ずるも、西方には行われず、東夏に廣闡す。化地と有部は、漢地にて行わるるに似たり。上座と正量は、印度にて盛行するも、余方には見えず。

初め部を分かつの時、二十具足せり。聖を去ること漸く遠ければ、法教、淪涓す。住持するの人無くば、部の計は即ち滅し、住持するの人在らば、部の計は乃ち存す。諸部には有り非有るを以てせず。而して其の部執の、存有り没有り。法有りと、法の用、不用を以てせず。而して諸部に於て、正を論じ邪を論ず。金杖を折るに、彼此俱に金なるが如し。但だ修行に依りて皆な四果を得るも、毀謗有らば並て三塗に墮するが如し。情と見と乖かざれば、

出たものでありますが、印度では既に滅し、于闐において盛んに行われました。その法藏部は、本は西方から出ましたが、西方では行われず、東夏で広まりました。化地（部）と有部とは、中国において行われていたようです。上座（部）と正量（部）とは、印度において盛んに行われましたが、その他のところでは見られません。

その初めに、部派に分かれた時は、二十部が具わっていました。聖者から去ること次第に遠くなつたから、仏法の教えは衰えたのです。（仏法を）住持する人がいないと、部派の数はなくなり、住持する人がいたならば、部派の数は存在するのです。諸もろの部派に、良いところがあるか、悪いところがあるかを以てするものではありません。その部派の執念が、存在したりなくなりました。法が有っても、法が役立つが役立たないかを以てするのでは

皆な是れ一法なり。

知見寡者⁵。即相是相非。識解寬者。
乃無彼無此。迷情執見。則有憎毀過生。
若達士通情。豈有憍謗正法。以斯解釈。
用蕩群疑⁷。願審參詳。無迷一法。

知見の寡き者は、即ち相に是とし相に非とす。識解の寬き者は、乃ち彼も無く此も無し。迷情の見到執せば、則ち憎、毀の過の生ずること有り。若し達士にして情に通ずれば、豈に正法を憍謗すること有らんや。斯の解釈を以て、用いて群疑を蕩かん。願わくは審らかに參詳して、一法にも迷うこと無からんことを。

ありません。諸もろの部派において、正を論じたり邪を論じたりするので。金の杖を折つても、彼も此も俱に金であるようなものです。ただ修行によつて皆なが四果を得ても、(法を)誇る者がいたならば、すべて三途に墜ちるようなものです。感情と知見とが互いに相反しなければ、すべては一つの仏法なのです。

知見の少ない人は、すなわちともに是としとも非としますので。見識の寬い人は、すなわち彼もなく此もないのです。迷つた人が見方にとらわれたならば、憎しみや毀りの過を生ずることがあるのです。もし仏法に精通した人であつて情に通じたならば、どうして正法を嫌つたり、非難することがありえましょうか。この解釈をもつて、それを用いて諸もろの疑問を取り除くと思ひます。願わくは詳細に參究し、一法にも迷うことがありませんよ

大乘二十二問本

丁卯年三月九日写畢

比丘法燈書

大乘二十二問本

丁卯年三月九日写し畢る。

比丘の法燈書す。

うに。

大乘二十二問本

丁卯年三月九日に写し畢った。

比丘の法燈が書す。

【校異】

この段は、A、B、I本三本の内、B本を底本とする。

- 1 A本は「的」に作る。
- 2 底本、I本は「部」を欠くも、A本により補う。
- 3 底本、A本は「論」に作るも、I本により「論」に改む。
- 4 底本、I本は「法」を欠くも、A本により補う。
- 5 上山本は「宣」に作るも、I本により「專」に改む。
- 6 A本は「者」を「先」に作る。
- 7 A本は「蕩」を欠く。
- 8 I本は「大乘」以下二十字を欠く。
- 9 底本は「丙申年二月 日書記」に作るも、A本により「丁卯年三月九日写畢 比丘法燈書」に改む。

【語註】

- 註1 廣闡…広く広まること。
註2 淪洞…薄れていくこと、衰えていくこと。
註3 四果…声聞の修行道の四つの階位。 須陀洹果 斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果のこと。

『大乗二十二問』の最後の二問である上記の第二十二問は、吐蕃王の贊普が、曇曠に対して仏教の部派分裂の歴史について問いを發し、これに対して曇曠が、かなりの長文を費して答えたものである。これは、曇曠の部派分裂の歴史に対する認識を研究する上で、大変貴重なものである。しかも曇曠は、当時敦煌地域に於ける著名な学僧であったことからすれば、彼の部派分裂の歴史に対する認識が、当時の敦煌地域に於ける代表的なものであったと思われる。曇曠は何を根拠にしてこれを述べたのかは定かではないが、ここでは部派分裂の歴史について最も権威あるものとされた『異部宗輪論』一卷を取り上げ、曇曠の述べた内容と比較することにした。

『異部宗輪論』は、唐の玄奘によって竜朔二年(六六二)に翻訳されたものである。その作者は、『大毘婆沙論』でも重要な役割を果たした世友菩薩とされているが、不明の点が多く、未だに確定されていない。この書の梵語原典はすでに散逸しているが、チベット訳の存在することが確認されてい

る。また玄奘訳以外に、真諦訳とされる『部執異論』と鳩摩羅什訳とされる『十八部論』の二種の異訳が存在するが、その三種のうちでは、玄奘訳の『異部宗輪論』が最も後世に影響を与えたものとされている。さらに玄奘の弟子にあたる慈恩大師基によって著わされた注釈書に、『異部宗輪論述記』がある。

内容的には、『異部宗輪論』が最も有力な部派の一つである説一切有部の立場から、根本分裂以降の部派分裂の歴史と各部派の宗義の要点を記述したものである。この書は、二つの部分に大きく分けることができる。第一の部分は、部派分裂の歴史を述べたものであり、第二の部分は、分裂した部派のそれぞれの宗義を述べたものである。ここでは、曇曠の第二十二問の答えの内容と比較するために、以下に提示するのは、『異部宗輪論』の第一の部分に限定することにした。その形式は、『大乗二十二問』の本文研究と同一とする。なお、文末の部派分裂の図式は、『異部宗輪論』の本文内容に

よつて、作成したものである。ただ上座部系の二とされる『大乘二十二問』では雪転部とされているが、それ以外は、二は則ち本上座部、転じて雪山部と名づく。の部分のみは、すべて両者に共通している。

異部宗輪論(部派分派部分)

如是伝聞。仏薄伽梵般涅槃後。百有
余年。去聖時淹。如日久没。摩竭陀国。
俱蘇摩城。王号無憂。統撰臚部。感一
白蓋。化洽人神。是時仏法大衆初破。
謂因四衆。共議大天五事不同。分爲兩
部。一大衆部。二上座部。

是の如く伝え聞く。仏薄伽梵、
般涅槃の後、百有余年、聖を去ること
時淹しきは、日の久しく没するが如し。
摩竭陀国の俱蘇摩城に、王の無憂と号
するもの、臚部を統撰し、一つの白蓋
を感じ、化、人神に洽し。是の時、仏
法の大衆、初めて破る。謂く、四衆の
共に大天の五事を議するに、同じから
ざるに因りて、分かれて両部となる。
一は大衆部、二は上座部なり。

このような言い伝えがあります。仏
薄伽梵「世尊」が般涅槃された後、百
年余りたつて、すでに仏の在世の時代
を去ること久しいのは、それは恰も太
陽が永く沈んだままのようであつたの
です。摩竭陀国の俱蘇摩城に、無憂と
いうものがいて、臚部(洲)を統率し、
ひとつの白光に蓋われたのを感じ、そ
の教化は人間界、天上界にあまなくい
きわたっていました。この時に、仏法
の信者たちが、初めて分裂しました。
すなわち、四衆が共に大天の五事を議
論したところ、意見が同じでなかつた
ために、分かれて二つの部派になつた
のです。一つは大衆部で、二つは上座
部でした。

四衆者何。一竜象衆。二辺鄙衆。三多聞衆。四大德衆。

其五事者。如彼頌言。

余所誘無知

猶豫他令人

道因声故起

是名真仏教

後即於此第二百年。大衆部中流出三部。一一説部。二説出世部。三鷄胤部。次後於此第二百年。大衆部中復出一部。名多聞部。次後於此第二百年。大衆部中更出一部。名説仮部。

四衆とは何ん。一は竜象衆、二は辺鄙衆、三は多聞衆、四は大徳衆なり。

其の五事とは、彼の頌に言うが如し。

余に誘わると、無知と、猶豫と、他に入らしめらると、道の声に因るが故に起こるとは、是れを真の仏教と名づく。

後に即ち此の第二百年に於て、大衆部の中に三部を流出す。一は一説部、二は説出世部、三は鷄胤部なり。次に後此の第二百年に於て、大衆部の中に復た一部を出し、多聞部と名づく。次に後此の第二百年に於て、大衆部の中より更に一部を出し、説仮部と名づく。

四衆とは何でしようか。一つは竜象衆、二つは辺鄙衆、三つは多聞衆、四つは大徳衆です。

其の五事とは、彼の頌に言う通りです。

余の人に誘われることと、無知と、猶豫と、他によって(悟りに)入らしめられることと、道は声に因るからして起こるとは、これを真の仏教と名づけるのです。

その後、即ち(仏滅後の)第二百年に、大衆部から三部が発生しました。一つは一説部で、二つは説出世部で、三つは鷄胤部でした。次にこの第二百年に、大衆部の中からまた一部が発生し、それを多聞部といたしました。次にこの第二百年に、大衆部の中から更に一部が生まれ、それを説仮部といたしました。

第二百百年満時。有一出家外道。捨邪
歸正。亦名大天。大衆部中出家受具。
多聞精進。居制多山。与彼部僧重詳五
事。因茲乖諍分爲三部。一制多山部。
二西山住部。三北山住部。

如是大衆部。四破或五破。本末別說
合成九部。一大衆部。二一說部。三說
出世部。四鷄胤部。五多聞部。六說飯
部。七制多山部。八西山住部。九北山
住部。

第二百百年の満つる時、一の出家の外
道有り。邪を捨て、正に歸す。亦た大
天と名づく。大衆部の中に出家し、受
具し、多聞し、精進す。制多山に居し
て彼の部の僧と、重ねて五事を詳らかに
し、茲の乖諍に因りて、分かれて三
部と爲る。一は制多山部、二は西山住
部、三は北山住部なり。

是の如く大衆部は、四たび破れ、或
いは五たび破れ、本末を別に説かば、
合して九部と成る。一は大衆部、二は
一說部、三は説出世部、四は鷄胤部、
五是多聞部、六は説飯部、七は制多山
部、八は西山住部、九は北山住部な
り。

ちようど第二の百年が終わった時
に、一人の出家の外道がいて、邪な道
を捨てて正しい道に歸りました。(彼は
は)また大天といいました。(彼は)大
衆部の中で出家し、具足戒を受けて、
広く(仏の教えを)聞き、精進していま
した。(彼は)制多山にいて、かの(大
衆部の)僧たちと再び五事について検
討しましたが、見解の相違によって、
(大衆部から)分かれて三部となりました。
一つは制多山部で、二つは西山住
部で、三つは北山住部でした。

このように大衆部は、四回分裂し、
あるいは五回分裂して、本より末まで
を別に数えていえば、あわせて九部と
なります。(それらは、)一つは大衆部、
二つは一說部、三つは説出世部、四つ
は鷄胤部、五つは多聞部、六つは説飯
部、七つは制多山部、八つは西山住部、
九つは北山住部でした。

其上座部。經爾所時。一味和合。三百年初。有少乖諍。分爲兩部。一說一切有部。亦名說因部。二即本上座部。轉名雪山部。後即於此第三百年。從說一切有部流出一部。名犢子部。次後於此第三百年。從犢子部流出四部。一法上部。二賢青部。三正量部。四密林山部。

次後於此第三百年。從說一切有部。復出一部。名化地部。次後於此第三百年。從化地部流出一部。名法藏部。自稱我襲探叔氏師。至三百年末。從說一切有部。復出一部。名飲光部。亦名善歲部。

其の上座部は、爾所の時を経るに、一味和合せり。三百年の初めに、少かの乖諍有りて、分かれて兩部と爲る。一は說一切有部、亦たは說因部と名づく。二は即ち本上座部、轉じて雪山部と名づく。後に即ち此の第三百年に於て、說一切有部より一部を流出し、犢子部と名づく。次に後此の第三百年に於て、犢子部より四部を流出す。一は法上部、二は賢青部、三は正量部、四は密林山部なり。

次に後此の第三百年に於て、說一切有部より復た一部を出し、化地部と名づく。次に後此の第三百年に於て、化地部より一部を流出し、法藏部と名づく。自ら我は探叔氏師に襲ると稱す。三百年の末に至り、說一切有部より復た一部を出し、飲光部と名づく、亦た

(それに対して)その上座部は、その時代を経過しても、一味に和合していました。(仏滅後の)三百年の初めに、わずかな見解の相違が生じ、分かれて二部になりました。一つは說一切有部で、亦た說因部ともいいました。二つは即ち本上座部で、また雪山部といいました。後に即ちその第三百年に、その說一切有部から一部が生まれ、犢子部といいました。次に後にこの第三百年に、犢子部から四部が生まれました。一つは法上部で、二つは賢青部で、三つは正量部で、四つは密林山部でした。

次に後にこの第三百年に、說一切有部からまた一部が生まれ、化地部といいました。次に後にこの第三百年に、化地部から一部が生まれ、法藏部といいました。(彼らは)自ら自分たちは探叔氏(目連)に襲るものだと稱していました。その三百年の末になつて、

至第四百年初。従説一切有部。復出一部。名経量部。亦名説転部。自称我以慶喜爲師。

如是上座部。七破或八破。本末別説成十一部。一説一切有部。二雪山部。三犢子部。四法上部。五賢青部。六正量部。七密林山部。八化地部。九法蔵部。十飲光部。十一経量部。

善蔵部とも名づく。

第四百年の初めに至り、説一切有部よ従り復た一部を出し、経量部と名づく。亦た説転部とも名づく。自ら我は慶喜を以て師と爲すと称す。

是の如く上座部は、七たび破れ、或いは八たび破れ、本末を別に説かば、十一部と成る。一は説一切有部、二は雪山部、三は犢子部、四は法上部、五は賢青部、六は正量部、七は密林山部、八は化地部、九は法蔵部、十は飲光部おんこう、十一は経量部なり。

説一切有部よりまた一部が生まれ、飲光部おんこうといたしました。また善蔵部ともいたしました。

(仏滅後の)第四百年の初めになって、その説一切有部から更に一部が生まれ、経量部といたしました。また説転部ともいたしました。(彼らは)自ら自分たちは慶喜(阿難)を師とすると称していました。

このように上座部は、七回分裂し、あるいは八回分裂して、本より未までを別に数えていえば、(あわせて)十一部となります。(それらは)一は説一切有部、二は雪山部、三は犢子部、四は法上部、五は賢青部、六は正量部、七は密林山部、八は化地部、九は法蔵部、十は飲光部おんこう、十一は経量部でした。

【語注】

註1 膽部：膽部洲 須弥山の周りに四洲があつて、その中の南方の洲を指す。ジャンプー樹が多くは生えている洲という意味。

